

2002年度 第20回世界ジュニアパワーリフティング選手権大会 結果報告

去る9月11日～15日まで、ロシアのソチにおいて、第20回世界ジュニアパワーリフティング選手権大会が開催されました。参加国数約20カ国、総参加者約150名という大会の中、我が岡山大学ウェイトトレーニング部からは日本代表選手として、橋本優美子（女子48kg級：教育学部4回生）、笹川真希（女子60kg級：工学部4回生）、詫間美冬（女子67.5kg級：法学部3回生）の3名が出場しました。その結果などを、日本選手団の活躍を交えながら報告していきます。

今回の日本選手団は選手14名、セコンド・コーチ等を含めて全17名で、選手だけで20名を超えていた昨年と比べると小規模の選手団となった。岡山大学の3名は日本選手団が成田空港で集合する前日から現地入りする行程を選択。9月8日(日)、大勢の部員に見送られ岡山空港から羽田経由で成田へ向けて出発した。

成田空港からソチへ行くにはモスクワ経由となる。約10時間という長時間のフライトを各自時間つぶしできるものを用意したり、選手団同士でおしゃべりをしたりして乗り切り、モスクワに到着。このモスクワで一泊したため、岡大の3人にとっては岡山からソチまで2泊をかけた大移動となった。

寒いというイメージのあるロシアだが、到着したソチはそのイメージとは違って、半袖で十分過ごせるほど暖かい所だった。宿泊するホテルから歩いてすぐの海では、海水浴客が大勢いるほどだ。ソチの周辺は「世界でもっとも緯度の高い亜熱帯」であるらしい。さすがにモスクワは、昼間でも長袖が必要なくらい寒かった。

ソチは国境に近いこともあり、初めは兵士ばかりが住んでいる町であった。しかし、暖かく良い気候であるなどの理由からだんだんとロシアのお金持ちが遊びにやってくるようになり、現在のようなりゾート地となっていったそうだ。

今回の大会会場はホテルからバスで15分ほどのところにあり、移動はホテルから定期的に出ているバスを利用した。周りは住宅街のようで、ちょっとした食料品・生活用品店がある程度の静かなところだった。試技はこれまでのように広いフロアではなくステージ上で行われ、試技中の会場内は非常に暗かった。観戦するのは映画館のような観客席に座ってであったので不便と感じた。

また今回特徴的だったのは、たくさんロシアの子供たちが大会会場に訪れ、選手のサインを集めていたことだ。特に日本人選手の周りに集まってきていたようで、中には寄ってくる子供の多さに辟易している人もいた。試合中にはロシアの選手が出てくるとかなりの盛り上がりを見せ、ロシアではパワーリフティングが盛んなのだと感じられた。

大会初日となる11日には、ロシアの民族衣装を着たロシアの人々が華やかさを添えた開会式で始まった。

11日第1セッションの女子44・48kg級では、日本からは3名の選手が出場した。

44kg級の**三浦里花**（中京女子大）はベンチプレスが非常に強い選手。今回もベンチプレスで金メダルを取ったが、1本しか取れなかったことが納得いかないようだった。その他にも、デッドリフト3位、トータル2位という素晴らしい結果を残した。

同じく44kg級の**服部磨衣子**（トライデント健康科学専門学校）は、48kg級で出た全日本ジュニアからは階級を落とし、今回初出場。結果は5位だが、ベストの記録が出せなかったことに悔し涙したらしい。

48kg級には52kg級から階級を落としした**橋本優美子**（教・4回生）が出場。体重減少からピーキングの調子を崩し、不安の残る仕上が

りのまま大会に臨んだ。もっとも心配されたベンチプレスはスタート重量落をとし確実に取れるようにし、また、岡山商科大の岡本のセコンドにも助けられて2本成功。スクワットの2本目でタイムオーバーをしたり、デッドリフトの1本目に失敗してしまったりと、第3セッションの女子60・67.5kg級には岡山大学の残り2名の選手が出場した。

60kg級に出場した**笹川真希**（工・4回生）は昨年・一昨年とセコンドとして世界大会に参加してきたが、今回初めて選手としての出場を果たした。移動の疲れがたまり体調はあまり優れなかった。ベンチプレスでは3本目に本命のベンチTシャツを着替えて自己ベストの80kgに挑戦したが、胸から浮かず失敗。成功していればベンチプレス3位になっており、本人も非常に悔いを残している。続くデッドリフト1本目では、コールされてから慌てて準備したため軽い重量を失敗してしまっただが、2本目で落ち着いて成功させ、結果7位となった。

夏に体重が60kg近くまで落ち、60kg級とどちらに出るか前日まで悩んでいた67.5kg級の**詫間美冬**（法・3回生）は去年に続き2度目の出場。スクワットの3本目では初めて132.5kgをあげることができたが、微妙な差でラックの合図よりも早くバーを戻してしまったため、もったいない失敗となった。ベンチプレスでは1、2本目とも傾きで失敗。三振への不安でいっばいの3本目もやはり傾きで失敗となり、失格という残念な結果となってしまった。

12日第1セッションには90kg超級に**谷陽子**（阪南大学）が初出場。スクワットで1、2本目失敗してしまい以前の失格が思い出されたが、3本目は無事成功。結果は6位であった。

第2セッションからは男子の試合が始まった。52kg級に出場した**栗原昭久**（埼大クラブ）は、昨年の大会で失格という苦い思い出がある。しかし今回は、スクワット2位、ベンチプレス2位、トータル2位というすばらしい結果を出した。デッドリフト3本目では必勝はちまきで気合を入れていた。

56kg級の**古賀光範**（芝浦工業大学）は去年は骨折のため出場ならずであったが、今年は復帰。デッドリフトで2本目を成功させていけば3位であったが、1本目しか取れなかったのがたたり、惜しくも4位であった。

もう一人の56kg級の選手は、関西No.1と自負する**白石匡**（阪南大学）。デッドリフトで1本しか取れず、自分のベストよりもかなり低い記録しか出せなかったことを非常に悔しがっていた。結果は8位となり、来年も出るぞ！と意気込んでいる。

第3セッション・60kg級には**角館武**（東海大学）が初出場した。移動の疲れから体調を崩していたらしく、また、あがってもフォームのミスから失敗を取られ、各種目1本ずつだけの成功。結果9位であった。

13日第1セッションの67.5kg級には、大学に近いこともあり夏休みから一緒にトレーニングしてきた**岡本孝義**（岡山商科大学）が出場。前日までのセコンドの疲れもあり練習では良かったスクワット205kgがあがらず、得意のデッドリフトも1本しか成功できずに、11位という無念の結果となった。

第3セッションの82.5kg級には、**三輪景吾**（中京大学）が出場。ソチの子どもと上手にコミュニケーションを取り、人気者に。試技中、地元ロシア勢に負けない”Keigo”コールが湧き起こった。ベンチプレスで205kgをあげ銅メダルを獲得し、218kgの世界記録も射程圏内である。総合では8位であった。

14日の第2セッション・100kg級には、今年でジュニア大会が最後となる**倉橋徹**（ノーリミッツ）が出場。昨年に続き今年も9

本成功かつ自己ベスト更新、ベンチプレスでは銅メダルという結果にとっても満足そうにしていた。総合では6位となった。

14日の試合終了後、ロシア連盟がソチ観光をできるようにしてくれ、ソチで一番高いアグンマウンテンへとバスで向かった。みんな連日の大会で疲れていたが、頂上にある塔から見える景色は壮大。まともに観光できない我々にとってはうれしいイベントであった。

最終日の15日第1セッションには日本人最後の選手・増田怜(阪南大学)が出場。好き嫌いの多い彼は、本番を迎えるまでロシアで体重が5kg減。スクワットでは1本目しか成功できなかったが、後の2種目ではしっかり成功させ、4位となった。

全試合が終わった後、19時からホテル「フレガット」にてバンケットが行われた。国別の表彰があり、日本は団体で5位であった。各国ごとにテーブルが用意されており、めいめいに乾杯を開始。センターホールではダンスをする外国選手が出てきて、日本選手団も外国選手団と一緒に写真を撮ったり、アドレス交換をしたり。通じない言葉でコミュニケーションをとるのに一苦労であったが、世界各地の同年代の仲間たちと過ごすこの時間はなんとともspecialなものである。出場してよかったと思える最高の時であった。

16日の朝、ホテルのロビーに集合してバスで空港へ。ソチの街やずっと通訳として付いてくれていた学生ボランティアの人達と別れるのは、とても寂しく思った。モスクワ空港では1時間ほどの自由時間があり、それぞれ家族や友人などへのお土産を買いに走った。ロシアの伝統品の人形「マトリョーシュカ」もたくさん並んでおり、多くのお土産にと購入。1つ1つの人形に願かけをすると願いが叶うそうだ。

そして再び約10時間のフライトを経て、17日の朝10時ごろ成田へと到着した。たった9日間ではあったが、日本がとてもなつかしく思えた。ここで日本選手団は解散となり、電車と新幹線を使い継いで岡山へ。岡山到着は18時ごろとなり、大勢の部員が駅で出迎えてくれた。非日常な生活から解放され心に穴が開いたような感覚を覚えつつ、ここで今回のロシアへの海外遠征は無事し終了した。

参加者から一言

【女子48kg級出場 橋本優美子 選手】

今回、ベンチプレスが練習でほとんどうまくいってないままロシアへ立つこととなり、正直失格しやしないかという不安がありました。無事、最後まで試技を終える事はできましたが、結果は良くはありませんでした。ピーキングがうまくいかなかったことで、自信を持って試技に臨めませんでした。今後、満足して本番を迎えられるような練習を心がけたいと思います。

【女子60kg級出場 笹川真希 選手】

今年は初めて選手として参加して、今までにないプレッシャーを感じました。世界レベルの選手を間近に見て、やはりまだまだ力不足であると痛感。世界で得た知識を部員に還元したいと思います。

【女子67.5kg級出場 詫間美冬 選手】

今回は、3年間の中でもっとも力を尽くしたピーキングだった。しかし、練習における悪いクセが出てしまい「失格」。絶対にこれだけはするまいと思っていただけに、ショックは相当大きかった。もはや、この失敗は世界大会でリベンジするしかない。

「過去の克服」—— 目標はただ1つ！来年のポーランドへの切符をつかむこと。

(文責：岡山大学ウェイトトレーニング部

世界ジュニア出場者一同)